

FLORA KANAGAWA

Jun. 1. 1990 No. 28

神奈川県植物誌調査会ニュース第28号

〒231 横浜市中区南仲通 5-60 神奈川県立博物館内 神奈川県植物誌調査会
TEL 045-201-0926・振替 横浜 3-10195

植物誌発刊後に記録された植物 (3)

(勝山輝男)

大涌谷自然科学館の石原さんより、箱根産の植物で抜けていたものを追加していただいた。その他にもいくつか追加変更された植物があるので、FLORA KANAGAWA No. 27 に引き続き報告する。

イトモ *Potamogeton pusillus* L.

植物誌調査で採集されたものはすべてアイノコイトモになってしまったが、昨年、箱根仙石原 (HAK-1) で本当のイトモを採集することができた。8月に果実をつけており、葉は長さ3~5 cmと短く、幅も約1 mmと細いものである。仙石原の小さな水たまりにフトヒルムシロやナガエミクリといっしょに生えていた。1989年8月7日、勝山採集。

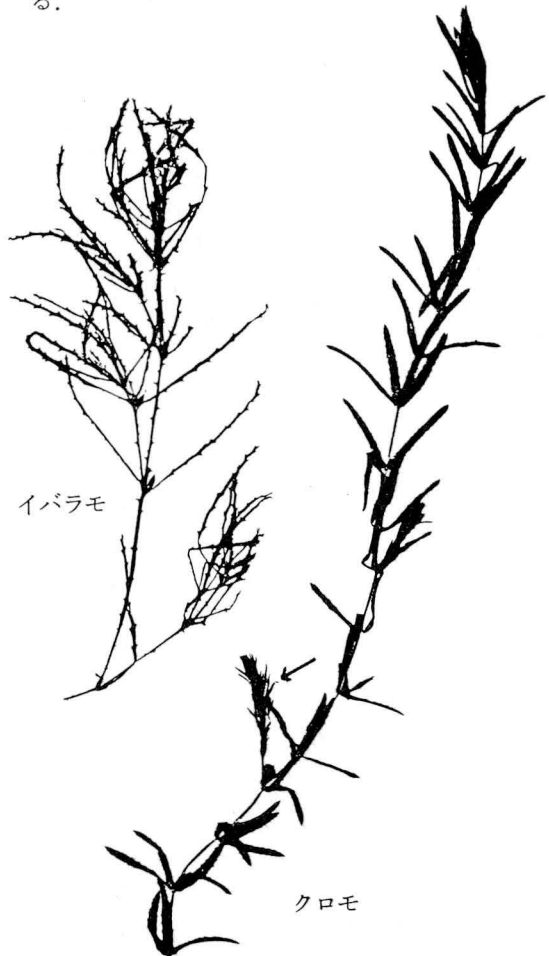
イバラモ *Najas marina* L.

松浦：箱根植物目録 (1958) や神奈川県植物誌 (1958) には名前が出ているが、今回の調査では発見されていなかった。1989年10月30日に箱根芦ノ湖 (HAK-3) で採集されたものを大涌谷自然科学館の石原さんより提供していただいた。葉は3輪生し、長さ3~5 cm、幅1~2 mm、茎とともに顕著な逆刺がある。葉腋には長さ6 mm位の果実をつけている。柱頭は2または3。

クロモ *Hydrilla verticillata* (L.fil.) Casp.

植物誌調査では栽培していたものの標本だけで、自生のものは採集されていなかった (補遺 p.1)。1989年10月30日に大涌谷の石原さんが芦

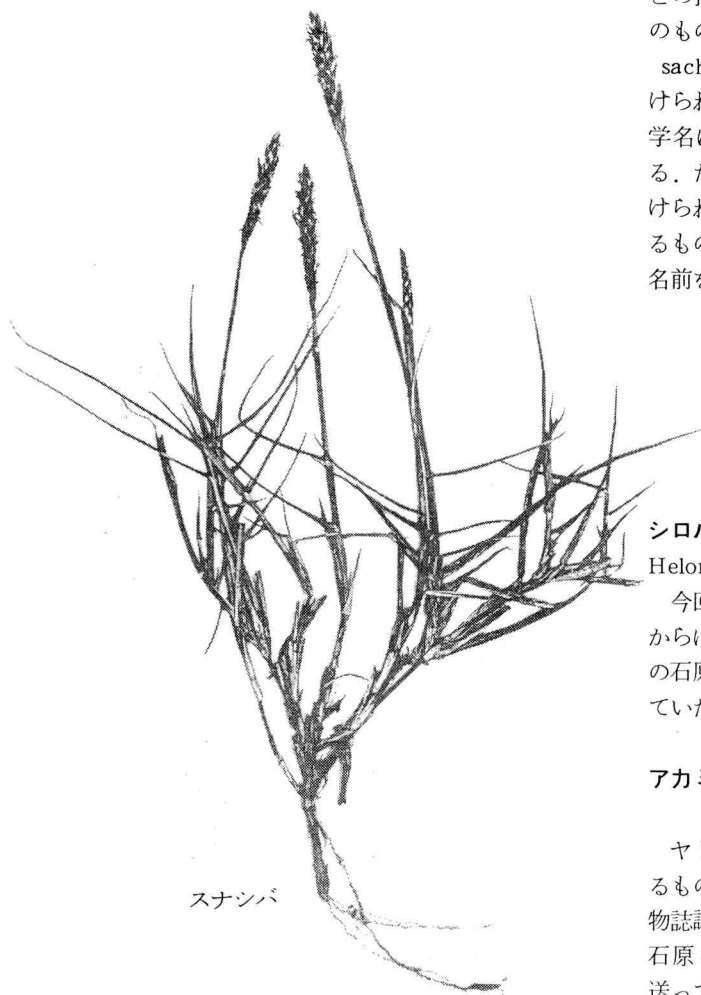
ノ湖 (HAK-3) で採集された。よく似たコカナダモは葉が普通3輪生するが、クロモでは4~6輪生する。茎もコカナダモよりも細く繊細なかんじがする。図の矢印のところに越冬芽をつけている。



スナシバ (オニシバ×シバ)

Zoysia x hondana Ohwi

1989年5月2日に茅ヶ崎市の柳島海岸の砂浜で、ナガミオニシバにしては全体が太く、オニシバにしては花穂が葉鞘につつまれていないものを採集した。調べてみたところスナシバらしい。平塚が基準産地になっているという。(植物誌p.264)



スナシバ

コツブヌマハリイ *Eleocharis parvinux* Ohwi

1990年5月7日、横浜市緑区 (Mi-1) の鶴見川河川敷に生育しているのを見つけた。植物誌でも箱根お玉ヶ池に群生していることを報告した (p.346)。神奈川県で2ヶ所目の産地である。関東地方と宮城県の伊豆沼にあるというが、分布の詳細はよくわからない。東京都北区で編集された「北区の植物」によると、荒川下流の河川敷にもあるという。神奈川県でも鶴見川の他に多摩川や相模川で見つかる可能性がある。

ゴンゲンスゲ (=コイトスゲ)

Carex sachalinensis Fr.Schm.

var. *iwakiana* Ohwi

植物誌補遺 (p.3) で栃木県の野口達也氏より、var. *sachalinensis* は北海道やサハリンのもので、関東地方や中部地方で見られるゴンゲンスゲはコイトスゲ var. *iwakiana* Ohwi であるとの指摘を受けたことを報告した。やはり北海道のもの和本州のものとは異なるようである。var. *sachalinensis* は北海道やサハリンのものにつけられたものなので、神奈川県でのゴンゲンスゲの学名はコイトスゲの var. *iwakiana* に訂正する。ただ、和名のゴンゲンスゲは日光のものにつけられたものなので、関東地方や中部地方に生えるものをゴンゲンスゲとし、北海道のものに別の名前をつけるべきと思う。

シロバナショウジョウバカマ

Heloniopsis nipponica (Ohwi) Nemoto

今回の調査では丹沢で採集されているが、箱根からは見つかっていなかった。大涌谷自然科学館の石原さんから早川の溪谷で撮影した写真を送っていただいた。

アカミヤドリギ *Viscum album* L.

var. *rubro-auranticum* Makino

ヤドリギの実はふつう黄色いが、赤い実をつけるものもあり、これをアカミヤドリギという。植物誌調査では見つかっていなかったが、大涌谷の石原さんから台ヶ岳西斜面で撮影された写真を送っていただいた。

タチキランソウ *Ajuga makinoi* Nakai

タチキランソウについては FLORA KANAGAWA No. 27 で城川先生が報告された。分布は西丹沢に限られていたが、5月1日に藤野町綱子 (FUJ-2) で採集した。綱子川の上流で石ころのごろごろした所に生えていた。西丹沢でも河原に生えていたので、ガレ場や河原などの石のゴロゴロした環境を探せば、他の地域でも見つかりそうな気がする。

アオスゲ類について

アオスゲ類はスゲ属の中ではもっとも分類が混乱している。植物誌発刊後も継続して調べたところ、イソアオスゲがあきらかになり、イトアオスゲとメアオスゲに変更が生じた。

イソアオスゲ *Carex breviculmis* R.Br.

var. *meridiana* (Akiyama)

植物誌 p.376 ではハマアオスゲのようにほふく枝を出す小型のアオスゲをヒメアオスゲ (var. *discoidea*) とした。しかし、本当のヒメアオスゲは琉球～四国に分布する異なるものであることを補遺で報告した。三浦半島、江ノ島、真鶴などの海岸岩場には、ハマアオスゲとは異なるものでほふく枝を出すアオスゲがある。同様のものが大島や三宅島の標本の中にも含まれている。これが、イソアオスゲ *C. meridiana* (Akiyama -1937- Journ. Jap. Bot. 23:652) と思われる。アオスゲの変種の一つとして整理することにし、上記の学名 (var. *meridiana*) を使用しておく。葉や茎はアオスゲのようにザラつかず、色も比較的濃い緑色をしている。雄小穂は線形。雌小穂は下部のものがやや離れ、苞葉は花茎よりもかなり長く、短いが明らかな鞘がある。根生小穂をつけることが多い。雌花の鱗片ののぎは発達しない。海岸の岩場だけでなく、海岸背後の樹林内や人家の石垣などでもよく見られる。昨年、三浦半島や江ノ島で調べたところ、海岸近くのアオスゲはほとんどイソアオスゲであった。生える環境によってはほふく枝が出ないために、他のアオスゲと混同してしまったようだ。

イトアオスゲ *Carex breviculmis* R.Br.

var. *filiculmis* (Fr. et Sav.) Kukenth.

植物誌 p.375 でメアオスゲとして図示したものは、本州中部から北海道に多い形で、これをイトアオスゲとすることが多いようだ。したがって、これをイトアオスゲに変更する。学名は *C. puberula* を用いる説もあり、今後変更される可能性もあるが、いまのところはよく用いられている var. *filiculmis* のままにしておく。雄小穂は細く、ときに短い。雌小穂は花数が少なく、鱗片ののぎは発達しない。最下の苞葉は花茎よりも短く、短い明らかな鞘がある。根生雌小穂をつけることはほとんどない。植物誌でアオスゲとして図示したような、こん棒状の雄小穂をもち、雌

花の鱗片ののぎが発達するものは、南方系のもので東北地方北部から北海道にはないようだ。

メアオスゲ (コアオスゲ)

Carex breviculmis R.Br.

var. *aphanandra* (Fr. et Sav.) Kukenth.

植物誌でイトアオスゲとして図示したものは、丘陵地にふつうに生えるもので、花数が少なく、雌花の鱗片ののぎが発達し、雄小穂がこん棒状にならないもので、根生雌小穂をつけることが多い。アオスゲは最下の苞葉もほとんど無鞘であるが、イトアオスゲ、メアオスゲ、イソアオスゲなどの苞葉には短い鞘がある。この形のものがもっとも変異が多く、小型のものではニイタカスゲとの区別がつかなくなる。雌花の鱗片ののぎの発達が悪くなり、苞葉が長くなるとイソアオスゲと区別しにくくなる。アオスゲの発育の悪いものもメアオスゲと区別しにくい。



イソアオスゲ

県北津久井の植物 (長谷川義人・小崎昭則)

1. タチゲキハギ *Lespedeza buergeri* Miq. form. *angustifolia* Makino

キハギの枝に立毛のあるものはタチゲキハギと呼ばれるが、これを青野原 (TS-3) と綱子川流域 (FUJ-2) で記録した。初島によれば一名ホソバキハギといい、溪側に出現するものようである。ただし、津久井産は狭葉でなく、Synonym とされている大井の発表した var. *kinashii* Ohwi タチゲキハギに相当するものであろうか。

2. カワチハギ *Lespedeza cyrtobotrya* Miq. form. *kawachiana* (Nakai) Hatus.

マルバハギの茎に立毛のある形はカワチハギといい、やや稀に見られるが、これを青野原と仙洞寺山国有林 (TS-5) の林道で記録した。焼山でも採集 (合同調査) したので津久井にはところどころにあるのであろう。

3. ヒロハミズタマソウ

Circaea mollis Sieb. et Zucc.

var. *ovata* (Honda) Hara

青野原の青年の家周辺と藤野町扇久保～菅野の間で記録した。山北方面にあるが、この地では新しいものである。

4. イワウメヅル

Celastrus flagellaris Ruprecht

県内の産は非常に少ないが、今回藤野の石砂山の北側と青野原 (TS-3) で記録した。両所共地上を這っているだけで樹に登っているものは見なかった。花が咲き結実する株は見つからない。津久井青根で浜中義治氏が記録している。

5. カシダザサ *Sasa shimidzuana* Makino subsp. *kashidensis* (Makino et Koidz.) S. Suzuki

石砂山北面と南側の菅井でそれぞれ採集できた。肩毛と稈鞘の毛は現在落ちてしまって新しいものでないと不明であるが、葉鞘無毛、葉下面に軟毛があり、稈は低く細く上方で1節1枝をつけ、長谷川所蔵城山町城山産 No. 13306, 1986の標本と照合したところ、石砂山産は葉がやや細いが、よく一致するので本種と同定した。

FUJ-2の新産。

6. カニコウモリ *Cacalia adenostyloides* (Fr. et Sav.) Matsum.

元来針葉樹林にある本種が津久井町青根の奥相模湖の山林で発見されたのは奇異である。併し葉下面が蒼緑白色であり、葉身がカニの甲に似ているから他のものは考えにくい。やや近縁のものではタマブキやミヤマコウモリを考えるが、これとは異なる。念のために長谷川所蔵南ア鳳凰山青木鉱泉上部産 No. 13250, 1986のカニコウモリと葉脈、鋸歯を比較したところよく一致するので一応本種と断定する。筆者の一人小崎の発見。神奈川県新産。道志川の谷底に一株2茎のみあった。

7. オニイノデ *Polystichum rigens* Tagawa

青野原と石砂山北面で記録した。青野原のものは岩崖のテラス上に数拾株があり発育よく非常に大形の立派なものである。近くにアオホラゴケもある。藤野-2は新産地。津久井-3は従来メモのみであるから再発見である。

8. タンザワウマノスズクサ

Aristolochia kaempferi Willd.

var. *tanzawana* Kigawa

石砂山北側仙洞寺山で記録したが、半原の塩川の滝道のものはおオバウマノスズクサであった。昨年静岡県小笠山で長谷川が見たものも毛が開出するタンザワウマノスズクサであった。

9. シグレヤナギ

Salix x eriocataphylla Kimura

仙洞寺山国有林林道で発見した。シバヤナギとバッコヤナギは水辺から離れた崖地に生育するのでしばしば雑種が出現する。

10. ウシタキソウ *Circaea cordata* Royle

神植誌に記録があるものの1988年版植物誌には白地図であった。今回、青野原で小崎のメモに入った。本種は元八王子城山や高尾方面にはあるので神奈川県津久井での出現は当然のことと思われる。

11. 神奈川県ニガクマイチゴ

藤野町舟久保の道路沿いで本種と推定される植物を運よく採集することができた。文献を調べたところ、新雑種発表の際、県下の産も一緒に報告

されていることがわかった。『神奈川県植物誌』(1988)では洩れてしまったので、合わせて報告する。

本種は、山口県大島郡久賀町(Kuka-cho)嵩山(Mt. Dake-san)において、岡国夫・鳴橋直弘両先生によって1969年5月11日に採集された標本(no.2162・京都大学)に基づき、鳴橋(1971)が「植物分類、地理」誌上に発表されたニガイチゴとクマイチゴを推定親とする雑種である(分地25(1):4-9)。学名は和名と同様に雑種親をわかりやすくするための配慮がなされ、*Rubus* × *nigakuma* Oka et Naruhashi とつけられている。同報告中の産地には、岡山県とともに神奈川県で採集された標本が引用されている(神奈川県宮城野村, 山本肇, no.2080・科学博物館の標本庫)。

以下に、鳴橋(1971)と今回採集した標本の特徴を示す。

◇ 鳴橋(1971)・・・初年茎の様子は中間的であるが、花茎は長くのび、この点でニガイチゴと区別される。また葉は3から5裂し、葉裏の脈上にも毛が出て、クマイチゴに似る。花は1個で、まれに2~3個つく。小花柄は1.0~1.5cmとニガイチゴ(約2cm)とクマイチゴ(約1cm)の中間を示す。

他に栽培品に基づく果実の性質の記述があるが、雑種であることから、変化は大きいようである。

参考・・・岡国夫・ほか編, 1972: 山口県植物誌。

◇ 今回の採集品・・・上記と比べるとかなりクマイチゴに近い印象のある個体である。すなわち、両種を識別する際によく用いられる形質のうち、葉の下面がかなり白みを帯びる、萼が多少暗紅紫色を帯び、その背面は毛が少ない(裂片では縁を除くとほぼ無毛となる)という2点を除くと葉脚が心形である、若枝や葉柄・花序の柄・下面脈上(初めは上面にもねた毛を散生する)に毛が出る、花数が最大4個と多い、小花柄が1cm以下と短いなど、他はクマイチゴの特徴によく一致する。発見地ではニガイチゴ(落花始まり)よりクマイチゴ(蕾で開花は見られず)の花期が遅れており、この個体は両者の中間状態を呈していたが、周辺の他地域では逆のケースも観察されることが(筆者の一人、長谷川による)であるので、この点についてはもう少し観察を続けることが必要と思われる。輪郭だけではわかりにくい雑

種個体であるので、ご興味のある方は神奈川県立博物館に収めた標本(小崎 No. 5563: 1990.4.29, 津久井郡藤野町舟久保, 藤野-2, 海拔約300m)を検討されたい。

12. モモイロキランソウ

ニガクマイチゴの次に立ち寄った藤野町小舟でのことである。道路脇のやや不安定な匍行型の斜面(細かな土砂の移動がみられる)の端に、紫花のキランソウと並んで生育する美しい桃色花を着けた一品があった。杉本検索誌に出ている淡桃色花の品種、モモイロキランソウ f. *purpurina* Honda に近いものと思われる。花は濃い桃色であったが、雅やかな名を重視する園芸品種の世界ではないから、モモイロの名を大きくみて上記の品種に当てておきたい。証拠標本用に株を半分に分けて採集した。筆者の一人長谷川は生時の花色を記録に留めるため、両者を並べて写真を撮った。

(小崎 No. 5564: 1990.4.29, 津久井郡藤野町小舟, 藤野-2, 海拔300~350m)

文献・・・杉本順一, 1983: 改定増補日本草本植物総検索誌 1 双子葉編. 井上書店。

(訂正第2版 →p.480)

なお、石砂山・青野原は4月28日、青根、綱子川、川上川、菅井〜亀見方面は4月29日に小崎・長谷川が、仙洞寺山は5月6日に長谷川が調査した。



ニガクマイチゴ

横浜のクマオシダ

(岡 武利)

クマオシダ *Dryopteris* × *tokudai* Sugimoto はオシダとミヤマクマワラビの雑種で、両親種の混生する地域に稀に生育している。外見はオシダに近いものから、ミヤマクマワラビに近いものまでであるが、諸形質は通常両親種の中間を呈する。即ち、葉柄の鱗片は濃褐色から黒褐色となり、オシダよりも濃いが、ミヤマクマワラビほど黒くはならない。裂片の幅は、90cm 前後に成長した株の中部羽片において3~4mm であり、オシダよりも狭いが、ミヤマクマワラビよりやや広い。側脈に単条のものと2岐するものが混じり、両親種からの良い区別点となる。

従来、横浜市内からは、本雑種の報告はなかったようで、『神奈川県植物誌』(1988)にも本雑種は記録されていない。しかるに 本年3月末、小崎昭則氏が横須賀市博物館に収納されているシダ標本の調査をされた際、筆者が1979年5月26日に横浜市緑区三保市民の森において採集したミヤマクマワラビとされていた標本(YCM.7314)を検した処、当該標本はミヤマクマワラビではなく、クマオシダであることを看破された。同氏の報告に基づき、筆者の手元に残っていた同一株からのさく葉を改めて検した処、当該さく葉はミヤマクマワラビによく似ているが、裂片の幅はミヤマクマワラビよりも広く、側脈は単条のものが多く、所々に2岐したものが混じり、紛れもなくクマオシダであることが確認できた。当該株は、1979年4月28日に見出し、新葉が展開し終えた同年5月26日に採集し、当時ご健在だった大谷茂先生にお送りしたものである。自生地はやや明るい杉と広葉樹が混生した林下で、アイアスカイノデヤリョウメンシダ等に混じって、オシダ2株と本雑種が1株生えていたが、ミヤマクマワラビは見られなかった。

小崎氏の炯眼によって、採集以来11年目に陽の目を見たクマオシダであるが、残念なことに、自生地の環境変化により1981年頃から衰退し、1983年5月に現地を訪れた際には、既に消滅しており、その後再発見できない。

なお、当該株はクマオシダであったことが判明したので、当該株の標本に基づいて記録された、『日本のシダ植物図鑑 4』(1985)のミヤマクマワラビの産地〔横浜-3〕は抹消される。

貴重な情報を提供して戴き、拙文を著す機会を与えて下さった小崎氏に深く感謝申し上げます。

神奈川県シダ植物補遺(1)

(小崎昭則)

県下のクマオシダの記録

横須賀市博物館所蔵の標本を調べさせていたところ、岡武利先生発見の横浜市緑区産の他にもう1点、大谷茂先生が1952年8月26日に丹沢塔ヶ岳において採集された標本(YCM.7544)が見つかった。いずれも葉柄や葉軸などに黒褐色の鱗片を有し、“ミヤマクマワラビ”として収められていたものである。小生も数年前までは本雑種を見逃していたが、その後注意したところ、埼玉県や長野県などにおいて数十株を見ることができた。これらの体験から、それほど生じにくい雑種とも思えず、西部の山地を中心に両親種の分布の重なりが大きい神奈川県下に記録のみられない(注)の気がなっていた。

(注)…横須賀市博物館には“クマオシダ”と書かれた標本が1枚収められているが、これはオシダである(内田光雄氏：港北区 上白根町、1965. 11. 20 : YCM.7374)。

2点の標本を確認できたことから、神奈川県立博物館所蔵の標本についても見直しを行うことにした。その結果、“ミヤマクマワラビ”として収められていた標本の中に本雑種と推定される数点の標本が混じっていることが判明した。

(守矢淳一氏：津久井町長者倉付近~犬越路下 TS-3, 1984. 9. 30 : No. 53793) (高橋秀男氏：三国山, 1985. 5. 26 : No. 53788 ; 長谷川義人氏：三国山, 1985. 5. 26 : No. 53783, 53786)

守矢淳一先生採集のNo. 53793は全体に黒っぽい鱗片が多く、ミヤマクマワラビに似た感じがあるが、裂片は最大4mm 程と幅広く(ミヤマクマワラビでは最大3~3.5mm 程度までのことが多い)、二又する脈がかなりの割合で混じる(ミヤマクマワラビはふつう単条)。ソーラスはやや外寄り、ミヤマクマワラビ(かなり外寄り)と比べると少し内に寄っている。

高橋秀男先生、長谷川義人先生採集の三国山産は性質がきわめてよく似ている上、採集年月日も同じであることから、長谷川先生に当時の様子を

お尋ねしたところ，“クマオシダらしいと思い、同じ株から採集した記憶がある．他にも何株かあったように思う”とのご返事をいただいた

(1990.5.6)．鱗片が黒っぽく、裂片の幅が最大3.5mm位になる点では守矢淳一先生の採集品と変わらないが、ソーラスが中間または僅かに内寄りである点、羽片の先端付近や裂片の上半部の狭い部分を除くと脈がほぼすべて二叉する点では、オシダの性質がより強く表れた個体といえる．

野外調査中に、黒い鱗片を有するにもかかわらず、葉面に多少黄色みが感じられる個体を見かけたら、ミヤマクマワラビと早合点せず、裂片の幅や脈理、ソーラスの位置などにも注意された(昨年、小石川植物園で見たミヤマクマワラビ展示品の中にも本雑種らしいものが混じっていた)．県下では西部の山地に広く分布している可能性が大きい．

なお、多摩丘陵においては、オシダが稀、ミヤマクマワラビが極稀であることから、岡武利先生のクマオシダの記録は大変貴重なものである．小生は緑区新治町のほぼ平坦な鞍部で1986年3月2日に貧弱なミヤマクマワラビを1株確認したが最近見当らなくなった．この株は岡武利先生が既に気付かれていたものと同じらしく、その記録は『日本のシダ植物図鑑4』に〔東京西南部-4〕“三保町”(1981)として引用されている．横浜市における近年のミヤマクマワラビの記録は、他に同図鑑に引用された磯子区氷取沢町(佐藤享氏,1981)が知られる程度であることから、上記のクマオシダの貴重さをご理解いただけるであろう．

横浜市のナンゴクナライシダ

1990年2月12日、旭区都岡町の2カ所において、横浜市新産と思われる本種を見出した．生育環境はやや明るい斜面疎林下またはタラノキなどの生える林縁付近である．

第1地点は、10m×15mくらいの範囲に大6株(葉長100~120cmに達する)、中2株が生育する．第2地点は尾根を一つ隔てた(直線距離にして約250m)谷底部に近い斜面下部で、伐採が間近に迫り、地形の改変された上部から少し土砂が流れ落ちている．中2株が生育する．第2地点のものは葉身や葉柄が黄緑色を呈し、葉柄が赤褐色で葉身が緑色(一般的なもの)の第1地点のものとはやや異なった印象を受けたことから、中池敏之先生にみていただいたところ、孢子囊中の孢子は

きれいに飛び散っており(小生は孢子ができていないものと誤認してしまった)、ナンゴクナライシダであるのご教示をいただいた('90.4.21)．

山本明先生が『神奈川県植物誌』(1988)のp.108に述べておられるように、調査が進めば産地の記録が増えそうな種類である．奥武蔵山地や御殿場方面に珍しくない．県南西部のシダ相の解明に大変大きな貢献をされておられる田中一雄先生の丁寧な調査によって、大磯町高麗からも1株発見されている．御殿場に近い小田原、南足柄方面に限らず、他の地域からも見つかる可能性が大きいので、“ナライシダ”を見かけた場合には、小羽軸上の毛(本種は密生)、孢子囊群の大きさ(本種は大きい)などに是非注意されたい．葉柄の鱗片が少なく、赤褐色を帯びること、植物体が大きいことなども補助的形質として見当をつける場合には役に立つ．

文献…中池敏之,1970:日本および台湾のナライシダ属について．横須賀市博物館研究報告(自然科学)第16号:37-43.

芹沢俊介,1986:日本産ナライシダ類の再検討(3)分類学的考察．植物研究雑誌,61(2):16-24.

田中一雄,1988:大磯町のシダ植物相について．平塚市博物館研究報告 自然と文化 No.11:29-54.

神奈川県産カタヒバ類の分布を見直す

横浜市北西部のシダフロラを地史的観点から捉えてみようとして記録の整理を始めたところ、『神奈川県植物誌』(1988)のp.53に示された“カタヒバ”の分布図が気になりだした．隣りのp.52には丁寧な部分図が描かれていたが、念のため、神奈川県立博物館所蔵のカタヒバとイヌカタヒバのカバーの中身について調べてみることにした．その結果、“カタヒバ”として整理されたものの中にイヌカタヒバとクロベゴケ(検討品・後述)が混じっていることがわかった．カタヒバの分布は地形との関連で、またイヌカタヒバのそれは地域の大まかな人為的改変の度合いを知る上で、幾つかの種とともに役立つような気がしたので、敢えてここに訂正記録を載せることにした．正しい分布図については、県博収蔵分以外の標本が一通り整

理された時点で作成したいと考えている。

◇ カタヒバ → イヌカタヒバ

(笠原基知治氏：高津区下作延，1987.11.7:No. 50202：この標本中にはクラマゴケが混じっており，本種の高津区の分布点も追加となる；笠原基知治氏：高津区長尾，1987.11.7:No. 50203)
(内藤美知子氏：金沢区薬王寺，1982.10.20:No. 50207) (山口育子氏：小田原 OD- 2，1986.4. 24:No. 50200) (田中一雄氏：小田原市石橋玉川流域 OD- 4，1982.11.16:No. 50201：“岩上に着生、一ヶ所のみ”のメモあり) (田中一雄氏：山北町浅瀬，大又沢右岸 YA- 4，1982.11.28:No. 50188：“岩側に少産”のメモあり)

中池敏之先生のご教示（'90.4.21）によると，“イヌカタヒバは昭和37年頃に世田谷区で確実に見られた”とのことである。また，田中一雄先生に小田原方面の産地の状況をお尋ねしたところ（'90.4.22），“早川流域のものは人為的影響の大きい地域であるだけにイヌカタヒバの可能性が大きいと考えられるが，山北町の大又沢については自然的な環境が残っており，意外である”とのご感想をいただいた。さらに“イヌカタヒバらしいものがよく植木鉢に生えてくる”ということも伺った。

以上のような状況から，“カタヒバ”の分布図に打たれた保土ヶ谷区や南区の+印（'79.1.1以前の文献に基づく）についても確認したいと思っていた。幸い，出典は大谷茂先生の神奈川県羊歯植物（1）にある“横浜：保土ヶ谷区希望ヶ丘（村上司郎，1965.8.20），南区六ツ川（長谷川義人，1956）とわかり，早速，ご本人の長谷川義人先生にお尋ねしてみた（'90.5.8）。“今の上六ツ川の山道の途中で採ったもので，料亭の石垣に完全に植えた感じでなく生えていた。天然生かどうかという点半々くらいの印象である。当時その上の方には狭い水田があった。標本は貧弱なもので，大谷先生に一度お見せした覚えがあるが，返されたか提出しなかったかで，15年程前までは手元にあった。その後，自分の目録を引用されたのかも知れない。当時の六ツ川あたりはすばらしいところで，タナゴ類？（菱形の平べったい魚）が採れ（直に暗渠となった），ホタルが水田の上をたくさん飛んでいた。ピロウドシダを見た記憶もある”とのことであった。イヌカタヒバの可能性が大きいそうであるが，何ともいえない。帰化品であったとしても貴重な記録となりえただけに，

標本確認のできない点が残念である。また，村上司郎先生からは，大谷茂先生に一度みていただいたように思われるが，標本が残っていないので，何ともいえない。可能性はある，というふうに考えたい。はっきりとしたことを言えなくて申し訳ない，と大変丁寧なご返事をいただいた。

これらの事情を考慮し，2地区におけるカタヒバの分布は現時点においては「空白」として扱いたい。

さて，ここまで県下のイヌカタヒバについて何の疑問もないように書いてしまったが，これが石垣島や西表島に産するものと同じ種であるかどうかについては全く自信がない。中池敏之著

（1982）の『新日本植物誌シダ篇』p.43に示されたイヌカタヒバの国内分布域が上記2島だけであること（ホウライシダの場合とは少し様子が異なる），浅井康宏（1971）に紹介されているように，本属のシダは日本に限らずヨーロッパでも幾つかの帰化の例が報告されていること，さらにこれと関連し，主に熱帯～亜熱帯に本拠を置く本属には約700に上る多くの種があると推定されていること，観賞価値が高い上に栽培が容易なことから，観賞の目的で遠方から短期間のうちに運ばれて逸出する可能性が小さくないと考えられることなどがその理由である。

よく似た“インベーター”が他にも紛れ込んでいられるかも知れない。大変有益な情報となった大又沢のようなケースも例外とは言い切れないことから，人里に限らず山地においても葉面の多少込み合った感じの“カタヒバ”を見かけたら，“イヌカタヒバ”を疑って，葉に出る白縁（p.52参照。半透明状に見える狭い縁取りのこと）の有無だけは確かめたい。“イヌカタヒバ”の白縁は，普通のルーペがあれば，十分確認できるものである。

文献…大谷茂，1966：神奈川県羊歯植物（1）。

横須賀市博物館研究報告（自然科学），第12号：31-51。（→p.35）

浅井康宏，1971：帰化植物ノート（2），
（2.東京附近に逸出帰化状態を示すシダ植物について）。横須賀市博物館研究報告（自然科学），第18号：15-17。

◇ カタヒバ → クロベゴケ（検討品）

（鮎橋郁夫氏：瀬谷区東野町，1981.8.26:No. 50206）

採集された鮎橋郁夫先生に生育地等について

お尋ねしたところ、はっきりと覚えていないが、アズマノであれば瀬谷市民の森の可能性が大きいとのことであった('90.4.21)。この時、小生は上記の標本を ツルカタヒバ と誤認していたのであるが、よく調べてみると地上茎の枝にたくさん毛をもつ点では『新日本植物誌シダ篇』p.34のツルカタヒバの記述と一致するが、地下茎が伸びる点は明らかに異なっていた。「ツル」の和名があるにもかかわらず、“地下茎が伸びず”と説明されていることから、同定の誤りの可能性が大きいと思ひ、調布市の都立神代植物公園において調査中に採葉(許可済み)した瀬谷区産と同一種と思われる“ツルカタヒバ”の葉をお手紙とともに中池先生に送って見ていただくことにした。数日後、“『杉本シダ検索誌』にクロベゴケとでているものだと思います。(ただし、杉本先生が同定した標本は見えていない) 学名は *S. mertensii* (これは *martensii* のまちがいであるとの注意書きがあり、小生も *S. mart. Spring* と確めた) と出ていますが、この学名はあてちがい。ではどういう学名が正しいかとなるとむずかしい。”(以下保留…いろいろとご説明をいただいているが、さらに調べてみますとの内容であったことから、先生の正式なご報告をお待ちしたい) とのご返事をいただいた('90.5.7消印)。

貴重なご教示・情報をいただいた先生方に心よりお礼を申し上げます。

横浜市内のミヤマイトチシダの記録

岡武利先生はこのほど(神奈川自然誌資料 11)に「横浜北西部のシダ植物」を發表されたが、ミヤマイトチシダの説明(p.136)の中に、南区の記録を紹介された。この記録が気になった小生は、著者に記録の出所を伺ってみた。すぐに下記の文献からの引用であると教えて下さった('90.5.6)。念のため、“採集者”の長谷川義人先生にお尋ねしたところ、“ラベルの間違いと思われ、南区では採集していない。湯河原産の標本が紛れて發表された可能性がある”とのご返事であった('90.5.6)。何らかの手違いがあったと思われるので、今後この記録を引用されることのないよう関係者をお願いしたい。なお、大谷茂先生には申し訳ないが、これはご本人のお許しとご意志に基づいていることをお断りしておく。

横浜市における本種の確実な記録は、緑区新治町に2カ所、三保町に1カ所、旭区上川井町に1カ

所(1990年3月8日発見)の計4カ所である。1990年4月現在、いずれも健在である。

文献…大谷茂、1968.3: 神奈川県羊歯植物

(3)。横須賀市博物館研究報告

(自然科学), No.14: 62-80+pl. 2.

(→ p.73-140. ミヤマイトチシダの項)

◇ 削除する部分

→ 長谷川義人…横浜: 南区弘明寺 1955.12.16

横浜市のタカオシケチシダの記録

『神奈川県植物誌』(1988)のp.144・145には横浜市緑区産の“タカオシケチシダ”が報告されているが、この引用標本(No.52851)を調べたところ、セイタカシケチシダの誤認と判明した。そのため、横浜市の記録は抹消かと思われたが、1989年12月10日に吉川アサ子氏・北川淑子氏と保土ヶ谷区の補足調査に出かけた際、“はけ”に当たる斜面人工林下の湧水点付近で大形の本物1株を見つめることができた。これが今のところ横浜市唯一の株と思われる。証拠標本用に葉を1枚だけ採取し、県博に収めた(No.102598)。この発見は地域をご案内していただいた吉川アサ子氏に負うところが大きい。

同様に、横浜市産の“シケチシダ”についても調べ直してみたところ、緑区新治町産以外の2点(旭区産、緑区寺家町産)についてはセイタカシケチシダの誤認とわかった。旭区においては他に標本が見当たらないので、分布図の●印は暫定的に+印(1979.1.1以前の文献による、の意)に変更することが必要である。これは、大谷茂先生が神奈川県羊歯植物(2)のp.67に“横浜、保土ヶ谷区上川井(村上司郎、1964.11.28)”を報告されていることに基づく。標本の有無、詳しい産地(当時と行政区画が変わっているため)などについて、村上先生にご教示をいただければ幸いである。また、寺家町産(No.52874)は『寺家の自然』に引用された“シケチシダ”であることから、巻末の目録にあるシケチシダを削除する。

両種は、付近に水が滲み出るような湿り気の多い谷底部や溝などの人工林下に生育することが多く、葉軸上の羽片の分岐点などに疣条の突起が出る(乾燥標本ではわかりにくくなるので注意が必要である)という特徴がある。

横浜市産カキノデの移植

1990年4月23日、勝山輝男先生と長津田町の一角に残る山地性植物等を観察に出かけた。目的の

一つでもあったキジノオンダ(勝山氏 1986.4.27 発見: No. 52191)の無事を確認し、続いてユキザサ・ルリソウ・ワダソウなどの春の花やセリモドキ・カタクリ・ツクバキンモンソウ・ミゾホオズキ・フジオンダ・キヨタキシダなどを観察した。帰途、クロツバラの開花を見ようと回り道をしたところ、付近一帯が大規模に伐採され、むき出しの土面が広がり、様相が一変していた。横浜市唯一の記録と思われるカタキノデ(小生1985.12.30発見: No. 54986)は無事であろうか。記憶している発見地に近づくにつれ、不安は増した。既に付近の樹林は伐採され、地表の改変も30~40m手前まで進められていた。まだ間に合う。何とか個体だけでも残したいと勝山先生に細かな地形の様子を説明した。倒れた木の間を祈るような気持で注意深く“搜索”したところ、暫くして勝山先生がこの株を見つけて下さった。あと一日遅れたら、横浜市のカタイノデは消え去っていたかも知れない。様変わりした周辺の様子と掘り取る状況を写真に撮ってもらい、その場を離れた。勝山先

生のご案内でオタルスゲを見た後、小生は仮植のため三保市民の森へ向かった。雨が降り出したが、新葉が伸び始め、旧葉が少々葉焼け気味の株にとっては恵みの雨である。場所を忘れないように、昨年発見したばかりの緑区2株目のサカゲイノデ(No. 100782)の近くに植えておいた。近くにはゴサクイノデ(県博・科博へ提出済)も2株あり、何人かの方に見守ってもらえそうである。雷が鳴り、一時は強雨にも見舞われたが、発見までの経緯とその後の“おつきあい”から、この日の雨は全く気にならなかった。一週間後の4月30日に立ち寄ってみたところ、旧葉は褐変していたが、新葉はよく伸びており、枯れる心配はなさそうである。

ここで、シダを観察される方に次のことをお願いしたい。① 暫くはこの株からの採葉を控える、② 誤って新産地として報告することのないように。もし、市民の森で別株と思われるものを発見された場合には、ご一報をいただければ幸いです。

ハハコグサとセイタカハハコグサとの交雑品

(小崎昭則)

大場達之先生は本誌No. 22(1986.10)にハハコグサ属についての報告を載せられたが、この中にハハコグサ *Gnaphalium affine* D. Don によく似たセイタカハハコグサ *G. luteo-album* L. が紹介されていた。この報告のおかげで、これまでに採集した小生の未整理品は一気に片付き、本属の植物が急によく見え出した。東京、千葉、茨城、埼玉と、行く先々でセイタカハハコグサも見つかった。

1988年5月10日、短い時間を利用して帰化植物の多い横浜市港北区へ観察に出かけたところ、中川町の車道脇のローム質の造成面に、ハハコグサとセイタカハハコグサのちょうど中間的な色をした両種の交雑品と思われる植物が生えていた。工事のトラックの出入口にも近かったので、根を付けて持ち帰った。一部の枝を標本とし、それ以外は生株観察用に鉢植えにしておいた。ところが、つまらぬ雑草と見えたらしく、植えたものは数日後にきれいになくなってしまった。しかたなく、残った“押葉”だけで観察を行うことにした。

ハハコグサはセイタカハハコグサの対応種(姉妹種)といわれるように、両者はひじょうによく似たもので、総苞の色や冠毛の色(前者…淡黄

色; 後者…ほぼ白色)を除くと、他の外見上の形質ではほとんど区別がつかない(小生の認識。ルーペ使用の範囲内)。総苞の中間的な色は言葉では言い表しにくい(写真や特殊乾燥標本であれば、ある程度伝達は可能であろう)ことから、両種の交雑品と判断するに至った別の有力な根拠はないものかと瘦果を調べてみたところ、全く熟していなかった。ハハコグサとセイタカハハコグサについても同様に調べたところ、総苞が色づく頃の瘦果は多少とも膨らんでくるのが普通であった(形や色はやや異なるが、よく熟すと小豆の甘納豆に似た感じになる)。簡単な観察ではあるが、これらの様子から交雑品であることはほぼ間違いないであろう。たった一例ではあるが、本来の自生分布域が異なる外見のよく似た近縁2種間で、生殖的隔離の起きていることを確かめられたのは大変幸運であった。生物的に両者が少なくとも亜種以上のレベルで区別可能なことを示唆しているからである。これはまた、在来品(注)と新しい帰化品との交雑という単なる表面的な話題にとどまらず、今後の両種の動向をみる上でも興味深い問題を投げかけている。

(注)…前川文夫先生はハハコグサを旧帰化品と推定された。

鶴見川中流域のメリケンガヤツリ

(北川淑子)

鶴見川におけるメリケンガヤツリ *Cyperus eragrostis* Lam.の記録は1987年9月7日に、飯野瑞子氏が横浜市緑区鴨居付近で1株発見されたのが初めてで、同年9月20日に内藤美知子氏が、やはり1株を佐江戸町で採集されたのみであった。その後、続く報告がないままに数年が過ぎ、相模川流域での分布状況を見聞する度に鶴見川のメリケンガヤツリが気になっていた。

そこで1989年10月15日にJR横浜線鴨居駅近くの河川敷(D地点)を訪れたところ、6×20m位の範囲にわたり、50株以上のメリケンガヤツリを観察することができた。一帯はズブズブと靴に水が染み込む地点もあるような湿った土地で、草刈りの行われた形跡もある。そのためか、メリケンガヤツリは花序をつけてはいるが、どの個体もやや貧弱で、草丈も40cm以下のものばかりであった。また、辺りには同じく丈の低いショクヨウガヤツリの若い株も散見された。

引き続き10月30日、11月1日、5日、21日と中流域(落合橋～亀甲橋までは右岸、亀甲橋～新羽橋先までは左岸)をメリケンガヤツリを探して歩いてみた。

流域の河川敷は、1.耕作地として利用している地点、2.浅く水がたまって、アシやガマの類、イ、サンカクイなどが群生している地点、3.乾き気味で、セイバンモロコシ、ヨモギ、アメリカセンダングサ等が繁茂している地点、4.定期的に草刈りが行われるらしく、植物全体の草丈が低く、やや湿った地点、5.コンクリート舗装の遊歩道が整備されている地点等がモザイク状に連なっている。

結果として、メリケンガヤツリは中流域全体に見られると言ってよいが、上記の環境のうち、主に4.の地点に多く見られた。

Aは狭い草地で、周囲に子株を従えた中位の株が2株見られた。

Bには小さい畑があり、その周囲の草地に大き

な株が1つと、花序をつけていない小株が点々と5株ほど見られた。

C付近は河川敷が狭くなっており、ほとんどがコンクリートの遊歩道で占められている。

その脇の土の部分に細々と丈の低いカヤツリグサやコゴメガヤツリ、ヌマガヤツリ、タマガヤツリ等が生えており、花序をつけたメリケンガヤツリも3株見ることができた。

Cを過ぎてからJ地点までの河川敷は広く、E～F地点の間には連続して畑が作られている。

Dは前述の通りだが、他に鴨居人道橋直下、上流寄りに生育状態の良いショクヨウガヤツリが群生しているのを発見。

Eではヒメクグ、カヤツリグサ等に混ざって、5×8m位の範囲の中に50株ほどのメリケンガヤツリが見られた。全体にD地点のものより、生育状態が良い。

Fはチガヤ、イヌビエ、コブナグサ、カヤツリグサ、コゴメガヤツリ等の生える草原で、5×15m位の範囲に30～50株ほどの中位の株が散見された。

GはF地点に比べるとやや乾いており、2×3m位の範囲の中に、花序をつけていない株も含めて20～30株ほどが、群生していた。周囲には丈の低いアメリカセンダングサやヨモギ等が見られた。



Hは裸地が多く、草刈りをして焼き払った後がある。しかし、よく見ると、上部を刈られたメリケンガヤツリが地面を這うようにして生えており、各々の株の間から新葉が伸びてきている。第三京浜の下5×5m位の間に30株以上、下流の小机大橋までの間には、さらに多くの株が見られた。

I 周辺は河川敷が2段になっており、下段の河川敷は湿り気が多く、水の溜っている箇所にはアシヤイ、ガマ等が群生しており、タコノアシなども見られた。メリケンガヤツリはその周囲の草地にポツンポツンと見られた。

J 周辺では、コンクリート護岸の凸凹の間に溜った土の上に、メリケンガヤツリの大株が見られた。また、低い河川敷に堆積した土のあちこちに比較的大きな株が見られた。

K～L地点までは河川敷整備のための工事車輛が入っており、草刈りをした後があった。その中で湿り気が多いK地点付近には20株以上のメリケンガヤツリが散見され、上部を刈り取られてはいたが、根元に小さな花序をつけたカンエンガヤツリ2株も見出すことができた。周囲に散乱している花茎の長さから推して、丈が1mはあった株のようである。

Lにはヒデリコ、ヒメヒラテンツキ、タマガヤツリ、アゼガヤツリ、イガガヤツリ等に混じって、上部を刈られた1株のメリケンガヤツリを見ることができた。

M周辺は上流からの土が堆積して河川敷が広くひろがり、一部には畑も作られている。周囲の草丈は高く、肥沃な感じがする。その河川敷の間に小さな流れの後があり、溝の部分に草丈60cmほどのメリケンガヤツリとカンエンガヤツリが各々1株と、数本のヌマガヤツリ、コゴメガヤツリが固まって生えていた。

N地点より下流は河川敷が狭いコンクリートの遊歩道になり、幅の広い中洲が岸に迫ってきている。遊歩道上には所々、土の溜った箇所があり、イネ科やカヤツリグサ科などの植物が細々と生えている。

N地点一帯の吹き溜りには1株から数株ずつのメリケンガヤツリを散見。

Oでは中洲の遊歩道寄りに生える大きな1株が見られた。

Pでは吹き溜りに大きな1株が見られた。

以上が1989年秋に鶴見川中流域で見ることので

きたメリケンガヤツリのおおよそであるが、1987年以後の2年余りの間にひろがったものと考えるとき、その繁殖力の強さには驚かされる。

種子による繁殖力については不明だが、1989年5月13日に相模川(下溝)で採集した若い株を浅鉢に植えておいたところ、6月に花序が伸び出し、10月には株分かれして新芽を出しているのを観察。さらに翌年1月には2番目の、3月には3番目の、4月には4番目の株が伸びてきているのを観察。約10ヶ月の間に若い1株が5株に増えたことになる。自然状態でも同様に増えると仮定すると、やはりその繁殖力はかなりなものである。吹き溜り等に生えている様子から乾燥にも強いことがうかがわれ、今後ますます分布を拡大していくものと予想される。

帰化と逸出の概念について

—植物誌新版に向けての私見1—
(浜口哲一)

何年先になるかはともかくとして、いずれは装いを新たに神奈川県植物誌のニューバージョンを世に送り出したいものである。そのためには、1988年版の問題点を洗い出し、検討を加える作業をしていく必要があるだろう。

●不統一な「帰化」と「逸出」

私が1988年版で気になっている点の一つに帰化と逸出の概念に関するところがある。41ページの凡例には「帰化植物とは野外に定着して再生産を繰り返していると考えられるもので、江戸時代末期以降に渡来したものをいう。逸出とは栽培植物が、野生状態で見られるものをいう。ほかに古い時代に作物等に伴って渡来したと考えられる、いわゆる史前帰化植物もあるが、リストや分布図には特に明記していない。」と述べられている。

しかし、本文の分布図を見ていくと、クマザサは帰化でヤダケは逸出、シンジュは帰化でセンダンも逸出、ウルシは帰化でリュウキュウハゼは逸出のように、似たような渡来事情の近縁種で表現が不統一な場合がある。ホテイアオイ・シンテツポウユリ・ハラン・キショウブ・ソバ・アオギリ・チャなどのように明らかに栽培植物が逸出した種にも帰化という言葉が使われている。コメヒシバ・クサイ・ヤハズエンドウは帰化となっているので史前帰化種も含まれているようだが、代表

的な史前帰化種とされるイヌビエには注記がない。歴史時代に渡来したシュウメイギク・ユキノシタは帰化とされているが、同様なヒガンバナにはない。国内の他地域に自生する種でも、アキニレは帰化とあるがシュロ・ヒメヤシャブシには注記がない。また、マルミノヤマゴボウのように自生種と思われるものが帰化とされているケースもある。ウサギノオのようにたった1ヶ所で1株だけ発見されたような場合は、凡例の定義からいえば、帰化と表現していいかには問題がある。このように、帰化と逸出の概念については、全体にはなはだ不統一な点が目立つと思うのである。

●帰化生物の種類

神奈川県立博物館の中村一恵氏は「日本の動物相における移入種および帰化種の位置づけに関する試論」（神奈川自然誌資料10, 1989）という論文の中で、帰化種の位置づけを下図のようにまとめておられる（中村1989を一部省略）。

この整理は主に動物を念頭において作られたものだが、帰化植物を考える場合にもおおいに参考になる。重要なのは、どうやって日本に入ってきたかという渡来手段と、どの程度定着しているかということに分けて考えねばならないという点である。

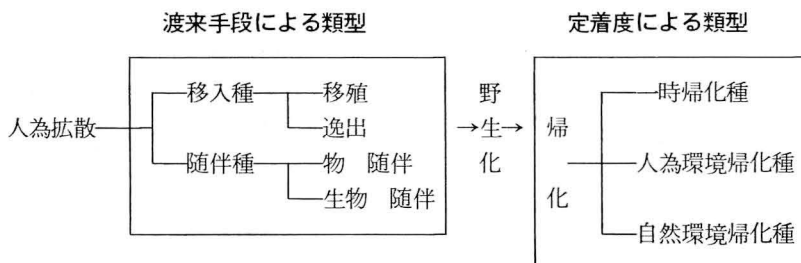
中村氏の論考を植物に適用して解説してみよう。渡来手段の内、移入とは人間によって意図的に持ち込まれた有用種であり、人為的に野外での増殖を目的に放された場合を移殖、逃げだしたり放置されたことが原因で野外に出たものを逸出と分けている。移殖種は、動物では淡水魚などで多くの例があるが、植物では少なく、砂防工事で土止めに使われる牧草などがこれにあたるだろうか。考えようによっては植林される樹種などは移殖とってよいかもかもしれない。逸出種は植物にも多くの例があり、食用、観賞用、牧草用、薬用な

ど様々な用途で栽培された植物が逃げだして野生化していることは周知の事実である。

随伴種とは、交通機関や貨物によって人間が意図しないのに運び込まれてしまう場合であり、植物でも多くの例が知られており、逸出と帰化を対立させて使う人は、このケースを帰化と呼んでいる。動物では、水草について小形の貝が入って来るように他の種類の動植物に随伴して渡来するケースが少なくないが、植物では特殊な場合に限られる。このように植物の場合は、渡来手段による類型として、移殖と生物随伴は例外的で、逸出と物に随伴した渡来の2通りを考えておけばほぼ全体を把握できるであろう。

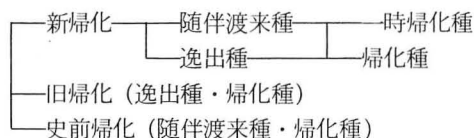
次にこれらがどの程度野生化したかということで、中村氏は3段階の区分を提唱し、実際には自然環境帰化種はほとんどないと言ってよいだろうと述べている。植物の場合、シュロが照葉樹林の林床で優占種になっている例、ダンドボロギクやベニバナボロギクが丘陵地から山地の広い範囲で伐採地のパイオニアになっている例などは自然環境帰化種と呼んでよいと思う。しかし、実用的には一時帰化（局地的または少数個体が生育しているが、安定して再生産を繰り返すかは不明のもの）と帰化（確実に国内で再生産を繰り返しているもの）の2段階を区別すれば十分であろう。

さらに、渡来の時代による区分も重要である。植物では、江戸時代末期の鎖国が解けて以降に渡来した新帰化種、歴史時代に渡来したことが明かな旧帰化種、石器時代に作物などに伴って渡来したと推定されている史前帰化種に分ける場合が多い。史前帰化種は前川文夫氏によって提唱された概念で、氏は現在農耕地周辺の人里だけに分布する種の起源をそこに求めておられる。これについてはあくまで仮説であり、どの種が史前帰化種にあたるかも定説はないので、自生種と分けなくてもよいという見解もある。



◎表示は6通りで!

以上のような点を考慮にいれて、帰化植物に関して分かりやすく表現するとすれば、少なくとも下記のような整理が必要であろう。



旧帰化と史前帰化については、特に後者は自生種と同様な扱いをしておいてもよい。なお、どちらも一時帰化種ということはありません、起源としては旧帰化種は逸出、史前帰化種は随伴渡来と考えてはば間違いないだろう。

そこで、植物誌の新版では「随伴渡来+一時帰化」「随伴渡来+帰化」「逸出+一時帰化」「逸出+帰化」と4通り、さらに言えば「旧帰化」「史前帰化」を加えた6通りの表示をすべきであるというのが私の意見である。ただ、随伴渡来という表現は一般的でないという問題があり、今回編集した「湘南植物誌4」では、便宜的に随伴渡来を帰化と表現し、「一時帰化」「帰化」「一時逸出」「逸出帰化」の4つに整理して示してみた。これは中途半端だが、比較的分かりやすいようにも思う。皆さんのご意見を頂きたいものである。

PR 「湘南植物誌 4」 平塚市博物館発行
B 5版180ページ 頒価850円

「湘南植物誌1~3」をまとめて4号を刊行しました。内容は湘南地域で記録された全種の分布図を1冊に収録し、各種については生活形、生育形、繁殖方法、帰化、用途などについて、簡単なコメントをつけました。3号以降の追加記録、同定の訂正などの補遺にあたる内容も盛り込んであります。3号までをお持ちの方も、お持ちでない方もぜひ、お求め下さい。一部の属は検索表も出てありますので、かなり便利な1冊だと自画自賛しています。ご希望の方は、送料とも1110円を下記までお送り下さい(260円は切手でも可)。

〒254 平塚市浅間町12-41 平塚市博物館
浜口哲一

前号No. 27の訂正ならびに補遺

◇ 記録の訂正 (小生の同定ミス等による)

[p.254右側]

・イヌイワガネソウ → イワガネソウ

なお、新治町では岡武利氏が1981年に本物のイヌイワガネソウを記録されている。

[p.255右側]

・ムクゲシケンダ → ムサシケンダ

横浜市では岡武利先生が1979年8月9日に緑区三保町(市民の森)で採られたのが唯一の記録と思われる(YCM. 3245)。なお、昨年5月14日、岡先生のご案内で発見地付近を探した時には確認に至らなかった。

・チャボイノデの産地: 矢指→上川井町

昨年5月14日、岡先生のご案内で見せていただいたもので、北川淑子氏が、採集した1枚を岡先生に代って収められたものである。

◇ 訂正

[p.246左上25行目] carva → calva

栃木県の野口達也先生にご連絡をいただき、誤りに気づいたものである。

[p.246左下5行目] 時に → 乾くと

[p.246右上2行目] 質 → 紫色

◇ 補遺

[p.255右下2行目]

・川井宿町産「タカオイノデ」は要検討品!

岡武利先生が報告された「横浜北西部のシダ植物」(1990)には、川井宿産のホクリクイノデが載っている。これは横須賀市博所蔵のYCM.3203(岡武利氏、1980.5.25採集)の個体に基づくもので、後に小生が採集した「タカオイノデ」No. 101088(1989.1.29)と同一のものであることが先生の現地におけるご教示により判明した。

本株は片親がアイアスカイノデであることは間違いないが、もう一方の親は外部形態からなかなか決めにくい難解な個体である。ツヤナシイノデはこの株から20~30mの地点に1株(中株)あるが、サカゲイノデは尾根を越え、250~300m離れた地点に1株(大株)、イワシロイノデに至っては約1.5km離れた地点に1株(中株)あるのが一番近い記録(1990.4健在)である。ところが中軸鱗片の向きや大きさをみると、イワシロイノデが片親であってもおかしくないような特徴が観察できるのである。外部形態に加え、染色体数や孔辺細胞の大きさ(山本明先生のご教示による)などの顕微鏡による観察、芽立ち・展葉時期、冬季の

生態などの野外における生態観察の併用の必要を痛感した次第である。

[p.258右上18行目]

ホソバテンツキの学名はP.241を使用。

◇ 校正洩れ

[p.236左上12行目]

・ Plystichum → Polystichum

(ただし、P. × gosakui Kurataは裸名)

[p.240左上18行目]

・ た を挿入

◇ 『神奈川県植物誌』(1988)の訂正

・ p.102のヨコハマイノデの分布図の●印

緑-2 → 緑-1

(以上・小崎昭則)

神奈川県植物誌総会報告

さる4月15日に金沢自然観察の森において、神奈川県植物誌調査会総会がおこなわれました。まず1989年度事業報告と会計報告、神奈川県植物誌出版概況報告がされ、承認されました。次いで1990年度事業計画案と予算案が審議され、決定されました。その後金沢自然観察の森の園長で、調査会の会員でもある林辰雄さんより神武寺周辺のイワタバコと佐渡のオオミスミソウについてスライドで講演をしていただきました。昼食後、自然観察の森を散策しましたが、途中からあいにくの雨になってしまいました。それでもシロバナハンショウヅルやオオバウマノスズクサの花も見られ、春の1日を楽しむことができました。総会の開催にあたっては自然観察の森園長の林さんに全面的に協力していただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

◎1989年度事業報告

1989. 4. 8 1989年度総会・フロラカナガワ26号発行

6.11 第1回野外研究会 西丹沢方面

7. 9 第2回野外研究会 横浜新治地区

10. 7 第3回野外研究会 三浦半島黒崎～小網代方面

11.28 フロラカナガワ27号発行

1990. 3.20 総会の開催と会費の納入について通知発送

* 調査会の事業ではありませんが、1989年7月～10月には横須賀市自然博物館で、特別展「三浦半島の植物」が開催され、植物誌調査の成果が展示されました。

